



# 一橋の女性たち

第26回

各界でユニークでエネルギーギッシュな人材が豊富と評判の一橋の女性たち。その活躍分野は多岐にわたっています。彼女たちがいかにキャリアを構築し、どのような人生ビジョンを抱いているのか？ 第26回は、大和証券グループ本社CSR室長の河口真理子さんです。聞き手は、商学研究科准教授の山下裕子です。

# CSRは両生類

## 外部不経済って何それ

**山下** 河口さんはCSRの専門家として活躍ですが、学生時代からそういった方向を目指していらしたのですか？

**河口** 道程をお話すると長くなります(笑)。大学3年のとき、環境問題に関心を持ったことが、そもそもの契機。経済学の授業で外部不経済について学び、「何それ。じゃあ公害はどうなるの」と思ったのです。外部不経済は大雑把にいうと、マーケットプライスのなかに組み入れられないものは、ないことにしようっていうことです。でも、公害はないことにしているうちに積み重なり、悪影響が広がってしまいます。見えるところだけ見る市場理論ではなくて、不経済な部分もひっく

るめて説明できるようなマーケットの見方は何か、それが、原点だったように思います。

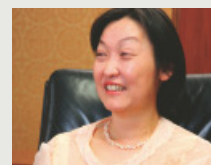
**山下** よくわかります。女性は、現実主義で、嘘やごまかしが嫌いですよね。男性は、論理的に美しい世界が好きですが(笑)。

**河口** 学生時代は、経済学が関心を示さない外部不経済がそのうち逆襲してくるのではないかと思っていました。大学院では排出権取引に関することなどを勉強しましたが、経済学の範疇としては捉えられていませんでした。もっと思いきり勉強したいなという思いがあったので留学を考えていたのですが、直前に父が事故に遭い就職することにしたんです。大和証券に入社したのは、マーケットを学ぶなら理論しかない大学より本物の市場に近い証券会社がいいのではと思ったからでした。とはいえ、当時は修士の女性をとる企業が皆無に近かったというのが大きな理由でした。



大和証券グループ本社 CSR室長

河口真理子氏



Mariko Kawaguchi

商学研究科准教授

山下裕子



Yuko Yamashita

山下 大和証券ではどんな仕事をなさっていたのですか？

河口 最初は支店向けの外国株の営業でした。私が入社した1986年当時は「いけいけどんだん」の時代、夜の9時10時までの残業は当たり前。コンプライアンスも怪しければビジネスは完全に男社会で、私が外線電話に出ると「誰か男性はいないの」(笑)。

## やりたいテーマが仕事になっていく

山下 そのなかでも、環境に関わりつづけていらしたとか。

河口 アフター5でNGOに参加し、リオサミットのサポートなどをしていました。91年に日本株のアナリスト部門に異動し、93年の組織変更で大和総研の翻訳チームに入りました。上司が理解のある人で、空いている時間に環境問題について勉強することを許してく



れました。97年に環境経営について社内論文集に書いたのがきっかけで注目を浴びるようになり、自分の仕事としてじょじょにCSRの評価制度づくりに関わるようになりました。エコファンドやコンプライアンスなどが社会的な関心を集める

ようになったのもこの直後からでした。この時期に育児休暇で10カ月程仕事を離れましたが、復帰後はCSRやSRI(社会的責任投資)の調査研究を中心に仕事をしています。

山下 軌跡を伺うと一本筋が通っているように見えます。ご自身のなかでやりたいことをしっかりと持ちつづけられたからなんでしょうね。

河口 20代の頃は辛くて、何度も辞めようと思いましたが(笑)。いま振り返ると、仕事として強制されなければ身につかなかった知識があとから生きてきた。また仕事を通して次々にやりたいテーマが出てきたから歩んでこられた。いまは自分に与えられたミッションだという思いで取り組んでいます。

## 成長神話からの脱却を真剣に考える時代

山下 女性の働き方にしても、環境問題にしても、この20年間で社会の規範はガラリと変

わりました。でも何もなかったところからいきなり変わったわけではなく、世の中の底流にあったものが、目に見える流れになったということだと思います。底流を掴み大きな流れを作り出したのは河口さんのような先駆者のお力ですね。

河口 いま私たちは、成長神話からの脱却を考えるべき大きなパラダイムシフトを迎えています。人類の歴史でいえば、いまという時代はかつての農耕革命と産業革命に続く大きな転換点なんです。地球規模での人口増加、資源の大量消費、自然環境の異変など私たちが直面している状況は、もう上に向かって成長や拡大を目指すのではなく横軸へ、持続的な循環社会へと進むべきだと方向を明確に指し示していますね。

山下 どんどん経済を発展させ成長を図る上昇志向では、もう限界点が見えている。これまでとはベクトルを変え、価値観を変えなければいけない時期がまさにいまであるということですね。

河口 でも、ネガティブに捉える必要はありません。むしろ、ネガティブなものもポジティブに変わり得るんです。例えば、日本は少資源国で国土の67%は森林



## 河口真理子 (かわぐち・まりこ)

1986年一橋大学大学院修士課程修了(環境経済)、同年大和証券入社。  
1993年より、大和総研にて、企業調査、経営戦略研究部長/主席研究員などを経て、  
2010年4月より、大和証券グループ本社CSR室長。担当分野は環境経営・CSR・社会的責任投資。  
NPO法人社会的責任投資フォーラム代表理事・事務局長。  
サステナビリティ日本フォーラム評議員、環境ビジネスウィメンのメンバー、東京都環境審議会委員など。



です。20世紀の価値観でいえば「森しかない」わけです。だけど21世紀の価値観で捉え直せば、「森がある」となる。実際、森は、今後きわめて重要になる豊富な水やバイオマス、生物多様性の源泉です。CSRにしても、かつての利益追求型から、社会に対していかに価値を生み出すかと、企業価値の転換が軸となっています。これは、海のなかの生物が陸へ上がる時代にとげた進化に匹敵するほど、すごいことだと思えます。

**山下** いまはその過渡期である、その時代に立ち会っているわけですからワクワクします(笑)。価値観の軸そのものが変われば求められる知恵も変化してきますね。

**河口** あらゆる事業体のガバナンスも多様化するでしょうし、技術のあり方も変わってきますね。私は仕事柄、環境に対応した新しい技術を見せていただくことも多いんですが、



対談を終えて

普賢菩薩は、観自在

「あら〜。それ、ナバホ族の?」

部屋に入るなり、私の人差し指の指輪に目を止めた河口先輩である。不意打ちにあってたじろぐ私に、「あのね、この前、素敵なネイティブアメリカン・ジュエリーのお店を見つけたの〜。ほらほら、この店」と、何やら名刺入れをごそごそ。パワーストーン話に話が膨らんでいく……。いや、今日は、CSR、CSR。

しかし、河口先輩って、こんなに、ミーハーでしたっけ……。

学生時代、河口先輩は、とびきりのキレモノとして、後輩一同から畏れられていた。涼やかなお顔立ちに、クールな物言い、そして、どこか、遠くを見るような眼差しがとても大人びていらっした。ざらりと経済学研究科の大学院に進学されたかと思うと、ひらりと実務の世界へ。

環境問題からCSRまでのキャリアの軌跡は、思慮深謀の結果とあっていただけで、どうもそうではなく、「あ、これ、面白そう」という直観と、「誰もやってないことをやる」、という開拓精神のなせる技のようである。社会が騒ぎ出すころには、もう、次のテーマに関心が移っている。

一橋の女性の先輩方は、本当に個性的で独立心旺盛だと思う。東大にだって進学できる成績だったけど、一橋が好きで進学し、自分でテーマを見つけて、どんどん突っ走る。単なるお勉強ができる優等生とは、一味も二味も違うのである。もしかしたらそのような知のあり方こそ、一橋を、体現しているものではないかしら……。

聞けば、ご家族、まさに一橋一家。お父様のみならず、お母様も一橋のご出身なのだそう。それに妹さんまで! 河口先輩は、唯一無二にして、一日にしてならず。

ナバホ族のジュエリーへの造詣から、ネイティブアメリカンの環境思想の話へ、「アバター」、グローバル天然資源戦略、森林管理と水資源など、話が尽きない。学問の領域を超え、実学と研究の境界もするりと超える。大人と子供が入り交じり、真剣とお茶目が交差する。

エコ素材で織られた桜色の衣に身を包み、柔らかく、すべてを包み込むような柔らかな表情が天女のように。携帯電話の待受画面には、何と、普賢菩薩の像。ヘルメス智って、東洋では菩薩界なのかもしれない。(山下裕子)

これはすごいなと思う技術も次々と開発されています。例えば、ある建設会社では、段ボールにアルミを貼り付けた組立式のダクトを開発しました。従来のスチール製と違って現場で組み立てられますから輸送時のCO2も大幅に削減されるんです。もちろん耐火性ではスチールより低いけれど、トータルで考え、こうしたセカンドベストを選択するというのも、大事な知恵だと思います。

**山下** 横に行く知恵とは、どうしたらみんなが幸せになるかという共生型の価値観ということですね。その意味では、女性の方が適合性が高いではありませんか。

**河口** そうだと思えます。女性はもともと男たちが狩りに出ている間に子どもを生み育て集落で共存してきました。男性に比べて柔軟だし、多面的な視点を持ちやすいと脳科学の研究から知られています。女性は企業社会で

は辺境に長く置かれていたから逆に冷静に俯瞰できるし、組織と一体になって頑張るとい価値観も持ちづらかった。傍流だったというところもあるでしょうが、どの会社もCSR部門に女性が多いというのも偶然ではないと思います。男性ももう企業戦士オンリーの視点を外していくべき時期ですね。企業人であると同時に生活者であり地域住民なわけですから、そうしたマルチな自分へと目を向けるといい。閉塞感のある時代を元気に生きられるキッカケになると思います。

